共立女子大学家政学部紀要　第64号（2018）

学童指導員の保育観
—保・幼・小連携における人的環境としての学童指導員に着目して—

Afterschool Care Staff Views On Childcare
Focus：Personal Factors in Transitioning from Preschool to Kindergarten to Elementary School

松本佳代子　氏家博子　小玉絹江
Kayoko Matsumoto　Hiroko Ujiie　Kinue Kodama

1、問題と目的

1999 年の児童福祉法改正によって学童保育は、「放課後児童健全育成事業」として法制化され、2012 年児童福祉法一部改正で放課後児童健全育成事業は、子ども・子育て支援法第 59 条第５条に規定する地域子ども・子育て支援事業として整理された。放課後児童クラブ（学童保育）は市町村の関わりを強化して質・量とも充実を図ることがめざされている。全国学童保育連絡協議会によると「2015 年５月１日現在の学童保育の実施状況調査結果」から学童保育数は２万 5541 ヶ所（3445 ヶ所増加）、入所児童数は 101 万7429 人と初めて100万人を超え、学童保育数、入所児童数とともにこれまでになく激増し、また把握できた「待機児童」は１万 5533 人で昨年比 6418 人増だという。

厚生労働省は、2014 年４月 30 日省令「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」（以下基準）に続いて、2015 年３月 31 日「放課後児童クラブにおいて集団の中で子どもに保障すべき遊び及び生活の環境や運営内容の水準を明確化し、事業の安定性及び継続性の確保を図っていく」として「放課後児童クラブ運営指針」（以下、運営指針）を地方自治体に発出した。学童指導員は、「放課後児童支援員」と呼称され「放課後児童支援員認定資格研修」が全都道府県で開始されることとなった。

先行研究について、学童クラブを対象にした研究を概観すると、学童保育の制度、政策、指導員について、放課後の子どもの現状とその対策、施策について、学童保育を利用する保護者やその生活について、障害児学童保育について、学童保育での実践について、学童保育の生活環境やその整備について、さらに運営主体の多様化と市場化、そしてサービス化について、様々な角度から研究がなされている。代田（2014）は、学童指導員に求められる資質として、意図的働きかけの担い手であり「異年齢集団における年長者」としての専門家であることを位置づけている。さらに学童指導員による意図的なかかわりが、子どもの自主性・主体性の発揮に関係していることも明らかにしている。放課後の子ども達の生活における自主的・主体的な活動の主な内容は遊びである。この放課後の遊びを保障するための学童指導員の意図的なかかわりは、遊びの発展や展開に大きな影響を及ぼしている。浜谷（2016）は、学童クラブ内での実践活動「ドッチボール」を例に挙げ、学童指導員は、技量の優劣や勝敗の行方にだけ注目するのではなく子ども達の工夫や知恵に感心し、子どもと同じ立場に立ってその素晴らしさに思いを寄せ、予想しなかったゲームの展開を楽しむといった意図的なかかわりの内容について述べている。

この遊びや生活の中での意図的なかかわりの背景には、個々の学童指導員の保育観が存在していると推測できる。自身の保育観を背景に持

ちながら子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活の姿を捉え、安心・安全な日々を送ることが出来るよう指導を行っている学童指導員が日々学童保育を実践していく上で特に大切にしていること（保育観）についての研究はまだ見当たらない。

そこで本研究では、小原・入江（2013）の研究で明らかになった保育観のカテゴリーを参考に、学童指導員は、学童保育を実践する上で何を大切に日々の支援を行っているのか。経験年数別に分析し学童指導員が特に大切にしている保育観を明らかにしていく。学童保育の必要性が年々高まり、また施設の数も利用者数も増加傾向にある中で、学童指導員の特に大切にしていること（保育観）を明らかにすることは、保育園・幼稚園・小学校との滑らかな接続や地域の中における緩やかな育ちを支援し実践する上で大切な要素のひとつであると捉える。また就学前から学齢期への移行期　子ども・子育て支援プロジェクト（2016）の中でも、「保育所待機児解消問題を契機に保育所定員を大幅に増やしてきた年齢層がまもなく学齢期を迎えます。そうした中、就学前の保育所と学齢期の学童保育は残念ながら、地域において両者の連携は充分にないのが現状です。さらにこうした流れの中で保育所・幼稚園・小学校の連携が求められ、就学前の幼児教育の充実にも取り組まれているところです。」との現状を踏まえ、保・幼・小の連携を人的環境として学童指導員の保育観に着目して考えていく。

2、研究方法

1）研究対象者

本研究では、学童で日々子ども達とかかわる学童指導員の保育観について明らかにすることを目的としている為、関東近郊の公私立学童指導員を対象とした。調査期間は、20xx年８月～９月。本研究者らが学童クラブ（放課後児童クラブ）に調査協力を依頼し、質問紙を郵送にて送付、回収も郵送によって行った。記入方法は、無記名自記式で行った。回収数は114名、その内２名は白紙回答であった為、対象は112名とする。回収率は82、３％であった。

2）対象者の基本属性

① 性別：女性：95名（84.2％）男性：17名（15.2％）

② 年齢：20～24歳15名（13.4％）25～29歳18名（16.1％）30～39歳23名（20.5％）40～49歳14名（12.5％）50歳以上42名（37.5％）

③ 職種：所長・館長20名（17.9％）主任９名（8.0％）学童指導員83名（74.1％）

④ 学童保育経験年数：高濱（2001）、足立・柴崎（2009）、小原・入江ら（2013）による保育者の成長段階で示される年齢区分を参考にして４群に区分した。２年未満29名（25.8％）、２年以上６年未満34名（30.3％）、６年以上10年未満25名（22.3％）、10年以上24名（21.4％）であった。

3）質問紙の内容

小原・入江ら（2013）の質問紙を参考に以下の項目で回答を求めた。Ｑ１では、「日々の学童クラブの生活の中であなたが特に大切だと思っていることは何ですか」を自由記述で問うた。Ｑ２では、Q2-1「Ｑ１でお答えいただいた大切だと思っていることは、現在のあなたの保育／支援においてどの程度行えていますか」を「充分に行えている」から「全く行えていない」までの４件法で問うた。そして、Q2-2「行えているおよび行えていない理由」を自由記述で問うた。Ｑ３では、「今より何が変われば、あなたが考えるよりよい保育が行えると思うか」を自由記述で問うた。

4）分析方法

小原・入江（2013）の研究から明らかとなった保育観のカテゴリーを参考に、KJ法にて分類した。KJ法の分析単位は、１センテンスを最小単位とした。一人の回答者が記述した自由記述において、同じカテゴリーが何度出現しても、

そのカテゴリーの出現度数は１と数えることとした。実際の作業で不一致が生じた場合は、共同研究者間で協議し不一致を修正した。なお出現度数の算出、X^2検定など、分析においては、統計ソフトSPSS Statistics（ver24、0）を用いた。

３、結果および考察

１．Q１の結果

１）KJ法による分類の結果

学童指導員が、日々の学童クラブの生活の中で、特に大切にしていることは何ですか（保育観）という問いに対して自由記述を求めた。小原・入江（2013）の保育観のカテゴリーを参考に、自由記述の内容をKJ法によって分類した（表１）。その結果、「安心できる環境（29.7%）」「家庭との連携（9.8%）」「対人関係（8.5%）」「気持ちへの寄り添い（8.1%）」「幼児理解（8.1%）」が多く表出していた。

安心安全な環境、放課後の居場所つくりなど、「安心できる環境」を大切にして指導に臨んでいる学童指導員の割合は、全体の約３割に及んでいる。その背景には、小学校下校後から帰宅するまでの時間を学童クラブで過ごす子ども達の主体的な遊びや生活を支援する学童指導員は、共に過ごす限られた時間の中で子ども達一人ひとりを理解し発達を捉えた上で支援を行うことより、全体の状況把握を優先的に考慮している現状が浮かび上がる。安心安全な環境を優先しながら学童指導員は、見守り役を担っていると推測できる。また'見守る'ことの意味も、子どもの発達を捉えた上での見守る援助というより、安心安全な環境の中で、一日を過ごすことができるように'見守る'という監視的な意味合いが含まれることが推測される。

２）学童指導員の経験年数別による比較

学童保育経験年数別による比較を行う為、X^2検定、残差分析を行った（表２）。結果、有意差が見られたカテゴリーは、「自己肯定感」（$X^2=6.05$　df=３　p<.05）、有意傾向が見られたカテゴリーは「幼児理解」（$X^2=6.84$　df=３　p<.10）、「主体性」（$X^2=6.28$　df=３　p<.10）、「家庭との連携」（$X^2=7.02$　df=３　p<.10）であった。

以上のように、「自己肯定感」は、経験年数６年～10年未満が有意に高い結果が得られた。この経験群は、学童保育そのものに慣れ、安心、安全な環境を保障することは、いわば前提の環境として捉えていることが考えられる。ここから一歩先の見通しを持って子ども達を指導することに気持ちが及ぶようになり、発達や一人ひとりの個人差を理解した上で学童保育を通して自己肯定感を育むことを大切にしていると推測される。

「幼児理解」「主体性」は学童保育経験年数10年以上群に有意傾向が見られた。「幼児理解」「主体性」は、学童クラブで子ども達を指導する上で大切な要素であるが、経験が浅い指導員は、学童クラブの持つ基本的な理念のひとつである安心安全な環境を子ども達に提供することを特に大切にするなど他の事柄を重要視するからではないかと考えられる。10年以上群で、有意傾向が見られた背景には、日々の学童クラブでの指導の中で、一人ひとりを理解した上でかかわることの大切さ、また子ども達が主体的に活動に取り組めるよう活動を構成することの大切さを再確認する事柄に直面した経験が関係していると推測できる。

「家庭との連携」は、学童保育経験年数10年以上群に有意傾向が見られた。学童経験の長い指導員は、学童クラブの中で、「家庭との連携」の役割を担うことが多くなることが推察される。経験的にまた役職的に保護者から意見を聞く機会が多いことが考えられ、ここから保護者との信頼関係を構築すること、共有する中で共に育てていくことを強く実感していく傾向にあると考えられる。この結果は、幼稚園教諭および保育士のもつ保育観の研究を行った小原・入江ら（2013）の研究からも同様の結果が得られている。種別に関わらず、経験年数を積み重ねる中

表1　Q1　KJ法による分類の結果

大カテゴリー	小カテゴリー キーワード	記述例	度数	%
子どもへの理解	1.『気持ちへの寄り添い』 子どもの気持ちへの寄り添い、声や心情に耳を傾ける、汲み取る、話を聞く、	・子どもの話や思いなど、子どもが伝えたいことをしっかりと聞く。・一日の中で少しでも多くの子どもと話し接する。・子どもとの会話（話をするだけではなく、話を聞くことも大切）・学校とは遊う場面で笑ったり泣いたり悩んだり、子ども達のその心に寄り添っていきたいです。	20	8.1
	2.『幼児理解』 一人ひとりの成長、心の成長を理解、個性を伸ばす、	・ひとりひとりの成長、特に心の成長にしっかりと目を向けて保育することが特に大切だと思います。・子どもひとりひとりの個性を伸ばしてあげられるよう支援していきたいと思っています。	20	8.1
発達の諸側面	3.『主体性』 子ども達の自立、自己発揮、	・自立できるようそのプロセスに寄り添って指導していくことが大切だと思います。・子ども自身が自分で考え行動できるように自立を促していくことが大切だと思っています。	14	5.7
	4.『自己肯定感』 子どもの自信、自己肯定観を育む	・一人の人間、人格として、受け入れられていると感じることのできる場作り。・支援をしながらも危険は回避する方向で、自由な発想や考えなどを受け入れて「共に一緒に」遊びを考えて実行していくようにする。	3	1.2
	5.『対人関係』 異年齢の子どもとのかかわり、関係作り	・友達や職員といった他者との適切な関係つくり。・他者との関係の作り方、距離の取り方、思いやりを育てる。・人のコミュニケーションを育むこと。	21	8.5
	6.『規範意識』 ルール、マナー、生活習慣の確立	・基本的生活習慣の確立。・生活のリズムを集団生活の中で身につけ、自分のことを出来るようになる。・挨拶、ルール、思いやり、いじめしないなど、日常生活の中で指導、育成をしていく。	9	3.7
保育環境	7.『子どもの発達を促す環境』 遊びの保障	・できるだけ子ども達が自分達で遊び、活動を繰り広げていくことができる環境つくり。・遊びや行事・文化的（手仕事・工作・栽培・観賞）な活動など子ども達の生活（心）を豊かにしていくための活動を工夫して提供する。・放課後の遊びの保障。	18	7.3
	8.『安心できる環境』 安心・安全な環境、居場所、見守り、楽しい場所	・子ども達の安全・安心な居場所つくり。・子ども達がホッと心を休めることができる場所。・利用する家庭が安心して子どもが預けられる場所であるという質を保つこと。・家庭のかわりのように、リラックスしくつろげる場の提供。	73	29.7
	9.『保育者自身の表情や行動見本』 笑顔、見本となる言動	・子ども達と遊ぶ時は、必ず自分自身も子どものように思いっきり楽しみ全力で行う。・人生の先輩として、学童指導員として日々子どもの味方で常にいられるように心がけ職務に励んでいる。	3	1.2
	10.『保育者自身の保育を楽しむ姿勢』 子どもと思い切り遊ぶ、楽しく	・自分が楽しくないと他の人も楽しくないので、私自身、健康第一に明るく楽しく笑顔で過ごしていくことです。	1	0.4
信頼関係・連携	11.『子どもとの信頼関係』 信頼関係を構築	・子ども達と少しでも多く関わって、子どもとの信頼関係を築いていくこと。・自分を理解してくれている職員との心豊かな交流。・子どもとの関わり、関係性だと思います。	18	7.3
	12.『家庭との連携』 保護者との共有、相談、子育て支援	・子ども達と関係性を作っていくと保護者とも関係性が出来てくると思います。・保護者とのコミュニケーションも大切にし、信頼関係を築き相談しやすいような関係をつくり、共に子どもが健やかに成長できるようにサポートしていくこと。保護者との信頼関係を築くこと。・保護者の思いを聞き取り、ともに子どもの成長発達を喜べる信頼関係を築いていってます。	24	9.8
	13.『保育間の連携』 職員間の連絡、報告、子育て支援	・施設内で職員間の連携、共有（情報の）することだと思う。・職員間の報告・連携・相談です。・職員間のコミュニケーションを密にし学童クラブの運営をスムーズに行えるようにすること。	16	6.5
	14.『地域、学校との連携』 校長、担任との情報交換、連絡、報告	・いじめ、虐待、貧困の早期発見、解決のために家庭、学校、各関係機関と連携を図る。・子どもたちの活動、生活の動線に関わる学校、地域との情報交換等。・	6	2.4

表2　　Q1　経験年数による比較（n）

大カテゴリー	小カテゴリー	2年未満 N=29		2年～6年未満 N=34		6年～10年未満 N=25		10年以上 N=24		Fisherの直接確率
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
子どもへの理解	気持ちへの寄り添い	5	25.0	9	45.0	4	20.0	2	10.0	0.396
	調整済み残差	-0.1		1.6		-0.3		-1.4		
	幼児理解	4	20.0	4	20.0	3	15.0	9	45.0	0.071
	調整済み残差	-0.7		-1.1		-0.9		2.8		
発達の諸側面	主体性	4	28.6	1	7.1	3	21.4	6	42.9	0.087
	調整済み残差	0.2		-2.0		-0.1		2.1		
	自己肯定感	0	0.0	0	0.0	3	100.0	0	0.0	0.022
	調整済み残差	-1.0		-1.2		3.3		-0.9		
	対人関係	5	23.8	4	19.0	9	42.9	3	14.3	0.117
	調整済み残差	-0.2		-1.3		2.5		-0.9		
	規範意識	1	11.1	2	22.2	2	22.2	4	44.4	0.388
	調整済み残差	-1.1		-0.6		0.0		1.8		
保育環境	子どもの発達を促す環境	5	27.8	5	27.8	7	38.9	1	5.6	0.156
	調整済み残差	0.2		-0.3		1.8		-1.8		
	安心できる環境	22	30.1	16	21.9	18	24.7	17	23.3	0.077
	調整済み残差	1.4		-2.7		0.8		0.7		
	保育者自身の表情や行動見本	1	33.3	2	66.7	0	0.0	0	0.0	0.622
	調整済み残差	0.3		1.4		-0.9		-0.9		
	保育者自身の保育を楽しむ姿勢	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0.215
	調整済み残差	-0.6		-0.7		-0.5		1.9		
信頼関係・連携	子どもとの信頼関係	5	27.8	6	33.3	2	11.1	5	27.8	0.650
	調整済み残差	0.2		0.3		-1.2		0.7		
	家庭との連携	7	29.2	3	12.5	5	20.8	9	37.5	0.063
	調整済み残差	0.4		-2.1		-0.2		2.2		
	保育間の連携	3	18.8	8	50.0	2	12.5	3	18.8	0.367
	調整済み残差	-0.7		1.8		-1.0		-0.3		
	地域、学校との連携	1	16.7	2	33.3	1	16.7	2	33.3	0.893
	調整済み残差	-0.5		0.2		-0.3		0.7		

で、連携、とりわけ「家庭との連携」について重要視する傾向にあることが明らかとなった。

2．Q2の結果

1）Q2-1　日々の保育の中で大切だと思っていることを行えている程度

全対象者の結果を見ると、「充分に行えている」が5名（4.6%）、「だいたい行えている」が78名（71.6%）であり、7割以上の回答者が肯定的回答をしていることが明らかになった（表3）。一方で「あまり行えていない」が25名（22.9%）、「まったく行えていない」が1名（0.9%）であり、否定的回答が2割～3割程度見られた。

全体の傾向を見るために、X^2検定を行った。（表3）結果、各カテゴリー間に有意差が見られた。（X^2=138.1　df=3　p<.001）

表3　Q2-1　日々の保育の中で大切だと思っていることを行えている程度

		充分に行えている		だいたい行えている		あまり行えていない		まったく行えていない		X^2 検定
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
全体	N=109	5	4.6	78	71.6	25	22.9	1	0.9	X^2=138.1 df=3 p<0.01
2年未満	N=28	0	0	21	75	7	25	0	0	X^2=9.76 df=9 p<n.s.
2年～6年未満	N=33	2	6.1	23	70	8	24.2	0	0	
6年～10年未満	N=25	3	12	15	60	7	28	0	0	
10年以上	N=23	0	0	19	82.6	3	13	1	0.4	

次に、経験年数別に比較を行うため、X^2検定、残差分析を行った。結果、有意差は見られなかった。

2）KJ法による分類の結果

Q2-2「日々の保育の中で大切に思っていることを行えている・行えていないことの理由」について、自由記述を求めた。小原・入江(2013)の保育観のカテゴリーを参考に、自由記述の内容をKJ法によって分類した（表5）。全対象者の出現度数を見ると、日々の支援の中で大切に思っていることを行えている肯定的な理由として「保育への前向きな意識や取り組み(15.0%)」と回答するものが多かった。逆に行えていないという否定的な理由では、「職員間や園としての課題（25.5%）」「保育に関する課題や自己の力量不足（14.6%）」が多く出現していた。

3）学童指導員の経験年数別による比較

学童保育経験年数別による比較を行う為、X^2検定、残差分析を行った（表5）。結果、有意差が見られたカテゴリーは、「一人ひとりの子どもの理解やかかわり方の工夫」（$X^2=9.37$　df=3　p<.01）であった。

残差分析の結果を見ると、2年～6年未満の学童指導員は肯定的回答の「一人ひとりの理解やかかわり方の工夫」で有意に高い値を示した。この群は、1年以上の経験を経て、気持ちに余裕が生じる頃であると推測できる。子どもたちに慣れ、子どもを理解できるようになると子どもたちとのかかわりに変化が見られるのではないか。経験と気持ちの余裕から一人ひとりに応じたかかわりや工夫を日々の学童クラブの生活の中で実践し、手ごたえや子どもの成長を実感しているのではないかと推測できる。さらにこの実感をもとに積極的に実践している結果ではないかと考える。またこのカテゴリーは、学童経験の浅い指導員が肯定的な回答を示す割合が高いことから、日々の学童クラブでの生活の中で、一人ひとりの子ども達とのかかわりを模索し考えながら向き合う指導員の姿のあらわれではないかと推察する。

3．Q3の結果

1）KJ法による分類の結果

Q3「今より何が変われば、あなたが考えるより良い保育が行えると思うか」という問いに対して、自由記述を求めた。小原・入江（2013）の保育観のカテゴリーを参考に、自由記述の内容をKJ法によって分類した（表6）。全対象者の出現度数を見ると、「職場環境の改善」が72名(32.4%)、「子ども環境の改善」が41名（18.5%）、「コミュニケーションの改善」が27名（12.2%）であり、今より何が変わればより良い指導が行えるか。と問いに対してその理由を自己以外に注目している割合が約8割と多く出現していた。

一方、その理由を自己に注目している人は、全体の2割となり、「保育力の向上」が20名(9.0%)と多く出現していた。

表4　Q2-2　KJ法による分類の結果

大カテゴリー	小カテゴリー キーワード	記述例	度数	%
肯定的回答	1.『保育への前向きな意識や取り組み』 楽しむこと、のびのびと過ごす、笑顔、自分の思いを意識して実践、	・常に監視されるように感じてしまったら、息苦しくなってしまうので、安全な見守りや対応をするが、子どもだけでのびのびと過ごせる様取り組む努力をしています。・毎日の帰りの会等で班活動(班対抗ゲームなど)を企画し、楽しんでいる。	32	15
	2.『一人ひとりの子どもの理解やかかわり方の工夫』 発達・個性に応じたかかわり、観察、子どもの自発性・主体性の尊重、	・1人ひとりが満足できるよう、その子の気持ちを直接聞いたりアンケートをとったりして、ホッとできる場つくりをしている。・子どもの顔をみて察知しその子にあったコミュニケーションの取り方を考えている。見守りつつも一緒に遊び子ども達が話しやすい空気や雰囲気つくりを心掛けている。	17	8
	3.『子どもの受容、共感的関係』 共感、認める、受け止める、子どもと共に遊ぶ、つながりの重視、心の受容	・子どもと接する時間を大切にし、時間をかけることで、子どもの気持ちを言葉で表現できるように待ったり、耳を傾けるよう、また自分の価値観を押し付けないようにしている。・子ども達のケンカ、トラブルでは、互いの言い分を一人ひとりしっかりと聞き「あなたを認めているよ」「あなたをわかっているよ」「あなたの味方だよ」と言葉で伝えることにより、素直になり、相手の気持ちも受け入れる気持ちになったり子ども自身も落ち着いて離しを聞くことが出来ていると思います。	11	5.2
	4.『家庭・保護者との連携の推進』 家庭・保護者との連携	・お迎えの時に家での様子やお家では学童での出来事をどんな風に話しているのか保護者の方から気軽に話してきてくれているから。・・保護者の悩みや相談に乗ったり、信頼を築いたりが出来つつある。・親からの相談(例えば学童でも友人関係の問題やいじめなどのトラブル)に時間と人員をかけて真摯に取り組んでいる自信があるから。	9	4.2
	5.『職員の協力体制、園環境の充実』 職員同士の連携、先輩保育者からの学び、園内研修、園の物的環境、	・研修も奨励してスキルの向上を心かけている。上記の積み重ねが実践にて活かされていることを感じることも多くなった。・職員間で話し合いを重ね、よりよい環境つくりのための方法や催しの検討、実施できているため。・朝夕の打ち合わせの中で、一日の体制やその日にあった出来事、反省点、翌日からの動き、子どもへの対応について確認し合っている。	21	9.9
否定的回答	6.『自分自身の時間や余裕のなさ』 仕事、時間に追われる、余裕のなさ	・日常のことで精一杯で余裕がない。・在籍人数が多く、1人ひとりと向き合う時間が足りていない。・日々の生活(受け入れ、送り出し、連絡帳チェックなど)が忙しく、中々子ども達とじっくり遊んだり、関わることが難しい現状です。	15	7.1
	7.『自己の思いと行為とのズレに対する葛藤』思いと行為のズレ、不安、葛藤、	・子ども達の安全のためではあるが、そのために子どもの遊びを制約しすぎているのではないか。と思うこともある。・児童館時代の学童クラブを思い出すともっとひとりひとりに職員が寄り添うことが出来ていた。子どもの何気ない話にも耳を傾けられていた。	10	4.7
	8.『保育に関する課題や自己の力量不足』 かかわりの際の力量不足、かかわりへの反省、	・私自身がまだ未熟なため、全体を見守れていないことです。全体に目が届くよう心がけているのですが、現実には今日の〇〇くんは？と確認の日々です。・私の努力不足だと思います。想定を超える事態が起こることも多々ありますが、想像力を豊かにし、子ども同士が安全に楽しく過ごせるよう見守っているつもりですが、子どもの数が多すぎて目が行き届かないのが現状です。	31	14.6
	9.『家庭・保護者との連携の課題』 家庭・保護者との連携への課題	・連絡帳の活用。保護者へ何かあったらすぐ電話を入れる体制つくり。・保護者や子ども達とのコミュニケーションえお徹底し、お互いの信頼関係を築き上げていきたい。・保護者への対応や相談、支援等は時間的にも難しい。地域との関係、学校側の協力体制	12	5.7
	10.『職員間や園としての課題』 園の環境(人的・物的)、職員同士の関係、園の方針や目標への課題、職員の労働条件	・クラブ児数に対して、居場所としての空間(広さ)が十分ではない。・職員の人数が少なく、部屋の大きさに対して子どもの人数が多い為、見きれていないことがある。・学年の1～5年生までいて、特別学級児童もいて、落ち着いた環境が整えられない。スペースも足りない。・職員間のコミュニケーション。支援を要する職員への対応に困り、コミュニケーションが取れない。	54	25.5

表5　Q2-2　経験年数による比較（n）

大カテゴリー	小カテゴリー	2年未満 N=29		2年～6年未満 N=34		6年～10年未満 N=25		10年以上 N=24		Fisherの直接確率
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
肯定的回答	保育への前向きな意識や取り組み	9	28.1	12	37.5	6	18.8	5	15.6	0.639
	調整済み残差	0.3		1.0		−0.6		−0.9		
	一人ひとりの子どもの理解やかかわり方の工夫	5	29.4	10	58.8	1	5.9	1	5.9	0.019
	調整済み残差	0.4		2.8		−1.8		−1.7		
	子どもの受容、共感的関係	3	27.7	4	36.4	1	9.1	3	27.3	0.779
	調整済み残差	0.1		0.5		−1.1		0.5		
	家庭との連携・保護者との連携の推進	2	22.2	2	22.2	2	22.2	3	33.3	0.851
	調整済み残差	−0.3		−0.6		0.0		0.9		
	職員の協力体制、園環境の充実	7	33.3	9	42.9	2	9.5	3	14.3	0.223
	調整済み残差	0.9		1.4		−1.6		−0.9		
否定的回答	自分自身の時間や余裕のなさ	5	33.3	5	33.3	3	20.0	2	13.3	0.839
	調整済み残差	0.7		0.3		−0.2		−0.8		
	自己の思いと行為のズレに対する葛藤	4	40.0	3	30.0	0	0.0	3	30.0	0.249
	調整済み残差	1.1		0.0		−1.8		0.7		
	保育に関する課題や自己の力量不足	8	25.8	5	16.1	8	25.8	10	32.3	0.125
	調整済み残差	0		−2.0		0.5		1.7		
	家庭・保護者との連携の課題	2	16.7	3	25.0	3	25.0	4	33.3	0.719
	調整済み残差	−0.8		−0.4		0.2		1.0		
	職員間や園としての課題	12	22.2	14	25.9	13	24.1	15	27.8	0.359
	調整済み残差	−0.9		−1.0		0.4		1.6		

表6　Q3　KJ法による分類の結果

大カテゴリー	小カテゴリー キーワード	記述例	度数	%
自己に注目	1.『ゆとり』 心のゆとり、時間のゆとり	・学童クラブに勤務し始めてからまだ半年です。そのため私自身に余裕がないため、ゆったり1人ひとりを大切に関われていないのが現状です。・職員がもっとじっくり児童と関わる余裕ができれば、より丁寧な指導ができると思う。	5	2.3
	2.『連携力(人間関係力)の向上』 職員間の連携、保護者との連携	・職員同士の情報交換。・職員同士、意見を出し合っていろいろチャレンジしてみることで、保育の幅が広がると思う。・積極的に子どもや保護者とかかわりを持ち、子どもや保護者が安心でき、子どもたちが職員を頼って話ができたり、日々の積み重ねが信頼関係をより密に築いていけるのではないかと思う。	8	3.6
	3.『保育意識の変革』 自分の意識の変容、視野の拡大、保育観の明確化	・学童指導員としてたくさん考え、本気で向き合い私が見つけ出したやり方です。今後もこの気持ち、意識を一番にかかげ子どもたちとそして職員と学童クラブを過ごしていきたいです。・よりよい保育を行うためには、職員の考え方や行動も大事だが、環境も大事だと最近考えるようになった。	7	3.2
	4.『保育力の向上』 保育内容の改善、こども理解を深める、保育実践力を高める	・子どもの特徴や個性を知ること、自分自身の遊びの引き出しを増やせるよう研究の参加したり、学ぶ姿勢をもつこと。・自分自身しっかりと勉強して細かい配慮のできる保育者になりたいと思っています。・もっと子ども達と遊び、話し、それぞれの個性をもっと理解して、私自身が吸収していかなければならないと思います。	20	9
	5.『自己管理』 体調管理、モチベーションの管理、	・スキルアップや今後につながる指導や長く続けていけるような配慮があれば良いと思います。	1	0.5
	6.『経験を積む』 経験を積む、自分を磨く	・もっと子どもたちと遊び、話し、それぞれの個性をもっと理解して、私自身が吸収していかなければならないと思います。・自分自身しっかり勉強して細かい配慮ができる保育者になりたいと思っています。・何年も仕事を続けていき経験を増やしていくこと。	3	1.4
自己以外に注目	7.『社会環境の改善』 保育政策の改善、待機児童の解消、社会の保育観の改善,児童の多様化	・社会全体が学童クラブの重要性を理解すること。・様々な問題を抱える児童の多様化・少子化に反比例し子どもは減っているはずだが学童保育所の利用者は増えている。ハード面ソフト面ともに各施設だけの努力ではなく学童保育全体で指導員と保護者、子ども達が一体となって努力していかなければならない。・保育時間を延長することより母親の就労形態を見直すべきだと思う。・子どもに家庭を取り戻す方策はないものだろうか。	15	6.8
	8.『職場環境の改善』 労働環境の改善、事務処理の経験、指導員不足の解消、職員の質の向上	・給与が経験年数によりアップしていくと職員のやりがいが出てくると思う。・十分な職員の人数確保、職員のモチベーションが上がるような福利厚生が充実していることなど(昇給、ボーナスなど)。・非常勤という労働条件ではなく、正規職員として採用して頂くことが必要だと考えます。	72	32.4
	9.『子ども環境の改善』 保育環境の改善、遊びの時間の確保	・保育スペースをもう少し広くしてもらいたい。・部屋の確保がよりよい保育・支援につながると思う。・学童の定員人数を減らし、子ども達がゆったりとした環境で過ごさせたい。・遊びを中断しないで過ごせる場所の確保。・よりよい保育を行うためには職員の考え方や行動も大事だが環境も大事だと最近考えるようになった。もっと環境が充実すれば、心に余裕が生まれ大人も子どもも遊びや見守りにより集中できると思う。・遊びの重要性が広く理解されること。	41	18.5
	10.『保育内容の改善』 保育内容の改善、行事内容の検討、研修の見直し、職員のスキルアップ	・よりよい支援・環境を整備し、職員が子どもの心理や発達のことを学び、まず子どもの視点にたてるよう知識を身につけ職務に活かす。・共通ルールの徹底と指導員の質の向上が必要だと感じます。・質のいい支援が行えるよう職員のスキルアップにつながる研修の充実が必要だと考えます。・子ども達が楽しいと思えること、夢中になるものを考えたり仕事に対して職員一人ひとりの意識も高める必要があると思います。	23	10.4
	11.『コミュニケーションの改善』 職員間の連携、保護者とのコミュニケーション、学校との連携・情報共有、地域との連携	・学校、クラブ運営者、クラブ職員、保護者が自分達の保身を図るのではなく、相手の立場を思いやり、子どものよき理解者として丁寧に向き合うことが大事だと思います。・職員の資質を底上げしている中で指導員としての基本的な技術や考え方を職務関係なく共有できたらと思います。	27	12.2

表7　Q3　経験年数による比較（n）

大カテゴリー	小カテゴリー	2年未満 N=29		2年～6年未満 N=34		6年～10年未満 N=25		10年以上 N=24		Fisherの直接確率
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
自己に注目	ゆとり	2	40.0	3	60.0	0	0.0	0	0.0	0.292
	調整済み残差	0.7		1.5		-1.2		-1.2		
	連携力(人間関係力)の向上	2	25.0	6	75.0	0	0.0	0	0.0	0.02
	調整済み残差	-0.1		2.8		-1.6		-1.5		
	保育意識の変革	1	14.3	4	57.1	2	28.6	0	0.0	0.332
	調整済み残差	-0.7		1.6		0.4		-1.4		
	保育力の向上	8	40.0	6	30.0	4	20.0	2	10.0	0.34
	調整済み残差	1.6		0.0		-0.3		-1.4		
	自己管理	1	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0.693
	調整済み残差	1.7		-0.7		-0.5		-0.5		
	経験を積む	0	0.0	1	33.3	1	33.3	1	33.3	0.789
	調整済み残差	-1		0.1		0.5		0.5		
自己以外に注目	社会環境の改善	4	26.8	3	20.0	2	13.3	6	40.0	0.288
	調整済み残差	0.1		-0.9		-0.9		1.9		
	職場環境の改善	16	22.2	21	29.2	17	23.6	18	25.0	0.486
	調整済み残差	-1.2		-0.4		0.4		1.2		
	子ども環境の改善	9	22.0	9	22.0	12	29.3	11	26.8	0.245
	調整済み残差	-0.7		-1.5		1.3		1.1		
	保育内容の改善	4	17.4	3	13.0	6	26.1	10	43.5	0.02
	調整済み残差	-1		-2.0		0.5		2.9		
	コミュニケーションの改善	7	25.9	9	33.3	4	14.8	7	25.9	0.723
	調整済み残差	0.0		0.4		-1.1		0.7		

2）学童指導員の経験年数別による比較

学童保育経験年数別による比較を行う為、X^2検定、残差分析を行った（表7）。結果、有意差が見られたカテゴリーは、「連携力(人間関係力)の向上」（X^2=7.59　df=3　p<0.5)、「保育内容の改善」（X^2=9.64　df=3　p<.05）であった。「連携力(人間関係力)の向上」については、2年～6年未満群が有意に高い値を示している。指導員として、2年経過した頃より職場の環境にも慣れ、職員間の連携や保護者、地域との連携が少しずつ出来るようになると、仕事の本質に興味関心が深まり面白く感じ始める頃ではないか。また自分の思いや考え方で仕事を進めてみたいと思う時期とも重なるのではないかと推察できる。「保育内容の改善」に関しては、10年以上が有意に高い値を示している。経験が10年以上になると、職場内の役割分担により責任を担う立場になり、個人よりも職場全体に目配

り、気配りが必要となる環境に置かれているため社会的な改善とりわけ保育内容の改善に思考が向いているのではないかと推察される。

まとめ

本研究の結果から、学童指導員が特に大切にしている保育観として「安心できる環境」「家庭との連携」といった子どもとの直接的なかかわりではなく、間接的なかかわりに関する回答が多いことが明らかとなった。これは決して一人ひとりの発達や子ども理解を重要視していないわけではないが、子どもが放課後の短い時間を過ごす学童クラブに求められるのは、怪我なく事故なくという学童の社会的な特性が表出した結果であると推測できる。保育園、幼稚園との関連で見ていくと小原・入江（2013）らの研究より、保育士や幼稚園教諭は、子どもへの理解や子どもの主体性など直接的なかかわりに関する回答が多いことが明らかになっていることから、保・幼・小の滑らかな接続には、直接的なかかわりと間接的なかかわりの両方が大切であり、両方を兼ね備えるスキルと意識が必要となってくる。学校終了後の放課後の居場所である学童クラブは保育所や幼稚園と比較して、子ども達の滞在時間が短い中で、一人ひとりを理解するスキルや発達を捉えた支援、さらに集団においての子どもの成長を具体的に理解することができる指導員の育成が求められる。就学前に遂げてきた一人ひとりの子どもたちの成長を学童指導員がいかに支え続けていけるかが大切になってくると考える。

また今より何が変わればより良い支援ができるかといった問いの回答として、全体の約８割は、自己以外の社会制度や職場環境といった学童指導員を取り巻く構造的な要因の影響やそれらの要因の改善に言及したものであった。自身の成長を願う気持ちよりも社会環境、職場環境の改善に気持ちが向いているのではないかと思われる。経験を積むことで生じる仕事の慢性化により自分自身は出来ているという感情もこの数字に反映しているのではないかと推測される。さらに小原、入江（2013）らの研究からも個人の努力だけでは、限界を感じ、社会や子どもを取り巻く環境が改善することに目が向いている実態が浮かび上がってくるなど、難しい現状が明らかとなっており、経験を重ねるからこそ見えてくる先の見通しの中に成功体験だけではない社会や子どもを取り巻く環境にまで目が向いていることが明らかとなった。

引用・参考文献

１）小原敏郎、入江礼子他（2013）、「保育者の保育観に関する研究－保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して－」、『保育士養成研究』、第31号、pp57-66

２）齋藤史夫他（2016）、「学童保育の研究動向2015（文献レビュー）」、『日本学童保育学会紀要』、6、pp73-86

３）就学前から学齢期への移行期　子ども・子育て支援プロジェクト（2015）、「保育所と学童保育の連携による学齢期の成長を見据えた保育」、東京都社会福祉協議会、美巧社

４）代田盛一郎（2015）、「学童保育における遊びとその意図的関わりに関する考察」、『大阪健康福祉短期大学紀要』、第14号、pp３-11

５）浜谷直人（2016）、「仲間とともに自己肯定感を感じることのできる学童クラブ－インクルーシブ保育の場として－」『児童心理』、70(13)、pp49-54

６）代田盛一郎（2010）、「学童保育における遊びとその指導に関する実践研究（１）－保育記録の分析を通して－」、『大阪健康福祉短期大学紀要』、第９号、pp37-46

謝辞

貴重なお時間を頂戴し本研究にご協力くださった学童クラブ（放課後児童クラブ）の先生方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。